HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	銅蘭川流域の森林植生
Author(s)	春木, 雅寛; 伊藤, 浩司
Citation	北海道大学演習林試験年報, 2, 23-24
Issue Date	1985-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72662
Type	departmental bulletin paper
File Information	1983_1-7.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

I—7　銅蘭川流域の森林植生

春　木　雅　寛・伊　藤　浩　司

1．はじめに

河川上流域では渓畔の下部広葉樹林から山地斜面の針広混交林、上部広葉樹林に至る多様な森林が少ない標高範囲に出現することから、著者らはこれを総称して流域森林複合体と定義し、その保全管理はこの複合体を中心として行なわれるべきと考えている[1),(3)]。この観点から北海道大学中川地方演習林、銅蘭川流域の森林植生について調査研究を行なった。

2．調査地概要

文献(1)をみよ。

3．調　査　法

調査は本流域の空中写真判読および現地踏査により優占種と相観から森林植生帯を区分した後、各植生帯で永久方形区を設定し、一般的な植生調査法に基づく方形区調査を行なった。

4．結果および考察

1)　森林植生帯

本流域の森林植生は40～383mにわたっており、僅かな高度範囲の中で変化する：383—210m；ダケカンバ林帯、210—120m；針広混交林帯、および120—40m；下部広葉樹（渓畔）林帯。

本流域の近隣にみられるペンケ山（716m）とパンケ山（631m）では最上部にハイマツ帯が発達し、その下部にダケカンバ林帯が約600～400mの標高にわたって発達し、更に下部に広葉樹林帯がつづく[5)]。本流域の植生帯の構成と比較すると、標高の関係でハイマツ帯を欠くが、ダケカンバ林帯は200mの低標高位からみられる。すなわち、ペンケ、パンケ山の垂直分布からみると本流域でのダケカンバ林帯は標高の上で下部に押し下げられた形となっている。また本流域では両山でみられる広葉樹林（シナノキ・イタヤ林、シナノキ・ミズナラ林）帯を欠如しているのが一つの特徴である。

これらの理由として積雪、風衝、温湿度などの現在の気象条件からは説明し難い面がある。梶[2)]は過去約10,000年間の気候変動が植生の分布や配列に与えた影響を花粉分析から本州山岳地帯で推定し、晩氷期以後の温暖期における垂直分布帯の上昇に伴う〝追い出し効果〟により、現在の山岳の緯度や標高の違いによるオオシラビソの分布の有無をかなりよく説明できる、と述べている。本流域の現在のやや変則的な植生帯の構成についても、梶の手法の綿密な適用によって、温暖期の〝追い出し効果〟などによって偏在性を説明できるものと期待される。

2)　現存植生

相観優占種により本流域の現存の森林植生は、I．人工林と、流域面積の大半を覆っているII 天然生高木林とに大別された。前者はトドマツ、アカエゾマツ、オニグルミ、ヤチダモ、カツラ、

ハルニレなどの各林分からなる。後者は下層の優占種との結びつきから、I. ダケカンバ林ではダケカンバ—ベニイタヤーウリュウザサ林II. 針広混交林ではシナノキ—ベニイタヤ—オオカメノキ—ウリュウザサ林、トドマツ—ベニイタヤ・ナナカマド—ウリュウザサ林、トドマツー（ベニイタヤ—オオカメノキ)—ウリュウザサ林、およびIII. 広葉樹渓畔林ではヤチダモーウリュウザサ林、ハルニレーウリュウザサ林、ケヤマハンノキーウリュウザサ林のように細分された。林床はいずれの場合もオオバザサ（*Sasa megalophylla*）の一種ウリュウザサ（*Sasa sylvatica Tatewaki*）[4]が優占しており、本流域は他の周辺流域（ペンケ川、パンケ川流域など）ではほとんどみられないウリュウザサによっても特徴づけられていることがわかった。

方形区調査の結果から、本流域森林はまだ十分に成熟した段階には達していない途中相とみなされた。各林分の更新状況に注目すると、上層優占種の後継樹はシナノキおよびトドマツを除いてほとんどみられず、ダケカンバ林やヤチダモ林、ハルニレ林およびケヤマハンノキ林の動態については不明な点が多く今後詳しく解明してゆきたい。

文　献

(1) 春木雅寛ほか：流域森林複合体の保全管理に関する研究(I)—銅蘭川流域—. 日林北支講, 30, 235—237, 1981.
(2) 梶　幹夫：亜高山性針葉樹の生態地理学的研究。東大農演研報, 72, 31—120, 1982.
(3) 並川寛司ほか：流域森林複合体の保全管理に関する研究(II)—森林の構造—. 日林北支講, 30, 238—241, 1981.
(4) 館脇　操：雨龍演習林植物調査（第一報）. 北大農演研究報, 7, 99—130, 1932.
(5) 館脇　操・五十嵐恒夫：北大天塩・中川地方演習林の森林植生. 北大農演研報, 28(1), 1—192, 1971.